
赤馬

kko

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤馬

【Nコード】

N6783M

【作者名】

kk o

【あらすじ】

赤い色を纏った姉妹と、小さな村で起こった連続放火事件。薬売り
りが今回斬りに来たモノノ怪とは？

序の幕

序の幕

午は火にて果つる。

陰陽思想に由ると、午の属性は陽の火だと云う。その為、何時の頃からなのか定かではないが、午の日には火災が多いと云われてきた。更に、同じ陽の火である丙ひのえが重なる丙午の年には、火の勢いが強くなるとの謂れも在り、六拾年に一度のその年は、花火師達や火消し衆が、始終緊張で顔を強張らせていたそうだ。

そんな丙午の年、午の日の出来事であつた。

其の村では朝から、否、正確には日の出前から、大騒ぎになっていた。

だから、薬売りが村に入った時も、其れを気に留める者は誰一人として居なかつた。

簡素な村に似つかわしくない喧騒。

おそらくは、村の衆全員が其処に居た。

「・・・何が、あつたんで？」

薬売りが近くの人間を捉まえて問えば、「火事だ。」と答えて顎をしゃくつた。

示された方を見遣れば、成る程黒焦げて崩れた家屋と、其れが上げる微かな黒煙が映る。

「こりゃあ、また・・・。」

派手に燃えたモノだ。

薄色の乗った唇を歪めれば、先刻さつきの村人が肩を竦めた。

「今月に入ってから、もう五件目だ。」

「ほう。」

薬売りの目がすうと細められる。目元と鼻梁に乗った朱は白い肌に燃える焰にも見えた。

「前の四件は、使われてない空家だとか倉庫だとかだったんだが・・。」

人垣の前列からどよめきが響く。蛋白質を燃やした時特有の、厭な臭いがした。

「・・・嗚呼、与作さん達は全員駄目だったのか。」

親と幼子二人の四人暮らしであったと云う。四つ全ての屍体^{したい}が出たらしい。

「・・・不審火が、続いて、いたのでしょうか。何故、見張りを、立てなかったのです？」

当然の疑問を口に出せば、昨夜は、正に渦中　と云うより火中であつたのだが、与作氏が見張りの当番だったのだと返ってきた。

「ほう・・・。」

呟く薬売りの背中で、薬箆筥がかたりと揺れた。

「時に、旦那。」

「何だい、薬なら、今は要ら無えよ。」

「否々。此れから、峠を越えていては、夜に成っちゃうんで・・・何処か、泊まれる場所は、在りませんか？」

嗚呼、それなら。

男は村の奥を指して言った。

「あそこの家が、部屋を貸してるよ。」

二階建ての、大きな家だった。

「・・・それは、どうも。」

話が終われば薬売りに興味は無いのか、男は直に人垣の中に分け入って行った。

かたかたと、薬箆筥から硬い音が聞こえてくる。薬売りは何事か呟いている様だったが、火事の喧騒に吞まれ、言葉が誰かの耳に届く事は無かった。

火は古くから神聖なモノとされてきた。

寒い冬には暖と成り、食物は火を通す事で腐らなく成り、時には武器と成り、暗闇に於いては導しるしと成る。

人と畜生の違いは何かと問われれば、火を使えるか否かだと答える。全てを焼き、無に還す。その所業は神其の物ではないか。

火こそが神なのだ。

私はそう思って居る。

火は美しい。

現世うつしよの穢れ全てを焼き尽くす。

此れが神で無くて、何が神で在ろうか。

そう、私はその神の氏子だ。

ならば、成すべきは一つ。

目の前で、轟々と音を立てて、穢れが燃えている。

嗚呼、何と美しい光景であろうか。

何たる事か。私は怒りに震えた。

私の神聖な行いを、敬わぬばかりか、不埒な行いだと中傷している輩が居たのだ。

産まれてこの方これ程の怒りを覚えた事は無い。

あれにはきつと、善くないモノが憑よいているに違いない。

嗚呼、早く燃やしてしまわなければ。穢れが広がってしまう。

早く。早く。早く。早く早く早く早く早く……。

神聖な儀式は人目に触れてはいけない。

だからこそ深夜を選んで行っていたと云うのに。

莫迦な村人共は、私の行いを理解しようとせず、夜に見張りを立てると言い始めた。

愚かさこそが罪と云うが、全く以って其の通りだと思う。

外界の穢れから、この村を守っているのは私だと云うのに！

人は何時の世も、神に逆らっては罰を喰らって来た筈なのに、まだ懲りないのか。愚かしい。

ならば。

ならば、此度も罰を喰らわせてやらねばなるまい。

其れを遂行すべきは、神に仕える私であろう。

手始めは、あの家だ。

私の行いを中傷した、あの男の家からにしよう。

当夜の見張りも確かあの男だった筈だ。丁度良い。

嗚呼、早く夜に成らないだろうか。

待ち遠しい。

とても、待ち遠しい。

式の幕

村人の全員が火事に掛かりきつてるかと思つたが、何処にでも例外は在るモノらしい。

薬売りが戸を敲いた其の家の娘がそれであつた。

「皆、揃いも揃つて火事見学だなんて、莫迦みたいでしょう？」

理由を質せば娘は笑つて答えた。

焼けた後が見たいのなら、竈の中でも覗けばいいのさ。

そう続ける娘に、薬売りは成る程とだけ返した。

「それにしても、御兄さん、美人だねエ。」

紫の頭巾から白群の小袖、桐の下駄まで嘗める様に視線を巡らし、娘は呵々と笑う。

「・・・それは、どうも。」

薬売りが頭を下げれば背負つた薬箆筥がかたりと音を出す。

「しかし、御嬢さんも、御綺麗だと、思いますかね。」

「厭だよオ、薬売りさんたら。」

頬を朱に染めながら、娘はまた呵々と笑つた。

「そう云えば、家に泊まりたいんだつたつ。貸してるお部屋は二階だけど、良いかい？」

構わない旨を伝えると娘が幾分くすんだ緋色の着物を翻した。

娘の後に続こうと下駄を脱ぎ、薬売りは視線に気付く。

廊下の奥からだつた。

薄暗がりの中、燃える様に紅い着物を着た禿が立つて居た。

「夏希。」

娘が気付いて声を上げる。

夏希と呼ばれた禿は微動だにせずに薬売りを見ていた。暗がりに立つ紅は奇妙な程不自然な印象を齎す。

「夏希、お部屋に戻つておいで。後で茜姉ちゃんが遊んであげるから。」

娘 茜が声をかけても夏希は動こうとしない。唯、視線だけが薬売りに注がれていた。

「・・・何方どなた・・・？」

微かに夏希の赤い唇が動く。蚊の鳴く様な細い声。

「今日お泊りになる薬売りさんだよ。さア、夏希、お部屋に戻っておいで。」

夏希は暫く無言で佇んでいたが、やがてゆっくりと首を縦に揺らした。

「・・・はい、御姉様・・・。」

消え入る様な声だった。

そうしてまた薬売りに視線を戻すと

「・・・ごゆっくり・・・御客様・・・。」

そう言つて不自然な程丁寧に頭を下げた。

矢張り、消え入りそうな、細い声だった。

「御免なさいね、吃驚びっくりしたでしょう？」

急な階段を上りながら、茜が苦笑する。

「・・・妹さんで？」

くすんだ緋色の裾を見ながら、薬売りは問い返した。

「そつなのよ。」

階段を上り終わった先の廊下で、茜は見えない筈の妹の所在へと視線を向けていた。

「今年で十二に成るんだけど・・・どうにも身体が弱くてね。村には歳の近い子も居ないし。」

姉はふうと溜息を吐いた。

「あら、厭だよ私ったら。御免なさいね。」

「否々・・・御気になさらず。」

此処がお部屋だよと茜が黄ばんだ襖を開ける。六畳の何も無い部屋だった。掃除だけは確しっかりしてある様だが、余り使われている形跡は無い。

大きな窓からは、先刻の火災現場が良く見えた。

「お蒲団は押入れに入ってるから好きに使っておくれ。」

夕餉はと問われて、否とだけ薬売りは返した。

「本当に何にも無い部屋だけど、まア、ごゆっくり。」

呵々と豪快に笑い、茜は部屋を辞した。

背負っていた薬箆笥を隅に下ろし、窓の外を見遣る。

焼け崩れた真つ黒な家の残骸がぶすぶすと、矢張り真つ黒い煙を幽かに上げている。

時間も遅くなってきた為か、人垣も随分疎らになってきていた。

がしゃんと音がして、真つ黒い残骸が更に崩れる。四人分の命を呑んだ家がぶわりと大きく煙を吐き出す。

煙が風に撒かれるほんの一瞬、其処に人の顔の様なモノが浮かんだ。おおと啼く風の音は、命を吞まれた人間の、憾みの声にも聞こえる。

ちりん。

窓枠に立つ白い天秤が、静かに其の身を揺らした。

参の幕

放火の事を赤馬と称する様になったのは何時の頃からか。

同様に、赤猫、赤犬等の名称も在るが、矢張り相應しいのは馬である。

燃え盛る炎は成る程赤い馬が鬣たてがみを靡かせ走る様によく似ている。

真つ赤な色に燃え上がる炎は派手で目を奪う。

しかし、火災に巻き込まれた人達が、火に焼かれて死ぬと云うのは意外に少ない。

焼かれる前に、煙に捲かれてしまふらしい。そうしてから悠々と、馬は全てを蹴散らして行く。

だから本当は、死者の怨念が籠っているのは炎では無く、煙なのかも知れない。

「・・・お客様・・・今、宜しいでしょうか・・・？」

消え入りそうなか細い声がした。

部屋の中央で座していた薬売りが、伏せていた臉を上げる。

「・・・どうぞ。」

応えれば、黄ばんだ襖が音も無く微かに動く。

「・・・失礼・・・致しますわ・・・。」

恭しく頭を垂れ、歳不相応な佇まいを見せるのは赤い禿の夏希りん。

襖を閉める音に混じって鈴が啼いた。

「・・・お客様は・・・薬売りを、していらっしゃるのだしたね・・・。」

「ええ。」

「・・・お薬を・・・頂きたいのですが・・・。」

「何の、薬を、御出しでしょうか？」

「・・・御姉様から・・・お聞きになったかと思いますが・・・私・・・身体が、弱いモノですから・・・。」

薬売りの正面に座った少女は、真っ赤な着物に能面の様な顔を乗せ、淡々と言葉を紡いで行く。

「そう云えば、この家には、貴女と御姉さんしか、居ないのですか？」

「・・・ええ・・・母は、私を産んで・・・その時に亡くなったそうですね。・・・父は・・・詳しくは存じませんが・・・矢張り、私が産まれて間もなく・・・亡くなっているそうです・・・。」

父母の死を語るその時でも、夏希の顔は何一つ変化する物が無かった。

「それは、それは。辛い事を、聞いてしまいましたね。」

「・・・構いませんわ・・・嘆いたところで・・・屍人は、蘇りは・・・しませんもの・・・。」

ちりん。

鈴の音がした。

それで、と口を開きかけた少女の表情が初めて変化する。微かではあるが、その変化が示すのは、驚き。

「どう、しました？」

薬売りが問えば、夏希は黙って窓の外を指差した。

「ほう。」

振り向いた薬売りの目に、真っ黒い煙が映る。おお、と風の啼く声がした。

煙には顔が在った。

絵物語に出てくる、怨霊の様な顔。憾み、悲しみ、怒り、そう云っ

た負の感情を一手に担った、其の顔。

おお、ともう一度風が啼いて、顔は直に溶けてしまった。
それでも、夏希は暫くその場所を見つめていた。

「・・・今・・・のは・・・？」

微かな驚きを面に乗せた儘、少女はぎこちなく唇を動かす。

「モノノ怪。」

窓枠に在る傾いた天秤を見詰めて、薬売りは答えた。

「あれはね、御嬢さん。モノノ怪・・・なんですよ。」

「・・・モノノケ・・・。」

「そう。モノノ怪です。」

悲鳴が聞こえた。

「御姉様!？」

夏希がらしからぬ大きな声を上げる。

その声を背後に、薬売りは駆け出していた。

茜は台所に居た。

腰を抜かした格好の儘、恐怖に目を見開いて窓の外を指差していた。

「・・・煙・・・煙が・・・!」

夏希と同じ物を見たのであろう事は、その言葉だけで解る。

薬売りの後を追いかけて来た夏希が、姉の横で小さく咳き込みながら肩を上下に揺らして居た。

「・・・御姉様、御姉様・・・御無事ですか・・・？」

咳の為か、姉と我が身に起こった事象の為か、妹の目は薄っすらと涙を湛えている。

「嗚呼、夏希。吃驚させちゃったね、御免ね。」

あやす様に髪を撫でながら茜は妹を抱きしめた。

そんな姉妹の傍らで、薬売りは茜が指差していた窓から外を見ていた。

遠目にだが、火事のあった家が其の窓からはつきりと見える。風が鳴った。

「・・・煙の姿をした、モノノ怪・・・。」

何時の間にか、薬売りの手には退魔の剣が握られている。

「・・・こりゃあ、煙々羅だ。」

かちん。

硬い音がして、剣の先に付いた鬼が歯を打ち鳴らす。

「・・・く、薬売りさん？」

訝しげな茜の声に、薬売りはついと口の端を上げた。

「私はね、茜さん。モノノ怪を、斬りに来たんですよ・・・。」

「・・・モノノケを・・・斬りに？」

「そう。その為には、この退魔の剣を、抜かなくてはいけない。」

「・・・退魔の・・・剣・・・？」

すう、と薬売りが剣を掲げる。

「退魔の剣を抜くには、条件がある。・・・斬るモノノ怪の形、真、理が揃わなければ、抜けない。」

赤銅色の鬼が、姉妹をじっと見据えている。

「よって、貴女々の真と、理・・・。」

ちりん。

鬼の髪に括られた、大きな鈴が鳴った。

「・・・お聞かせ願いたく、候。」

肆の幕

この世には、人が在る。神が在る。あやかしが在る。その其々に、形が在る。真が在る。理が在る。

因果の糸と、縁の針とが、形を紡ぐ。得た形に、真が宿れば、理を生ずる。

真とは、事の有様。理とは、心の有様。

神が創った形に、あやかしの真が重なり、人の理が潜れば、出来た其れは、何か。

其れは、もののけ。

“もの”とは、何か。

其れは、荒ぶる神の事。

“け”とは、何か。

其れは、病の事。

では、モノのけとは、何か。

其れは、荒ぶる神の如く、人を祟る、病の事。

否、病の如く、人を祟る、荒ぶる神の事。

否々、人の如く、云々。

では、モノノ怪を斬りに来たと云う、この男は、何か。

其れは・・・。

其れは

ちりん。

部屋の襖、押入れの引き戸、手前の壁、奥の窓。びつしりと貼られた其れは札。

描かれた目玉の様な紋が、中央に座す三人を、じっと見詰めていた。更に、其の三人を囲むのは無数の天秤。

「・・・貴女々は、知っている筈だ。モノノ怪、煙々羅の、真と、理を。」

低く流れた声に、赤い姉妹はびくりと震えた。

「・・・何故、火災を、見に行かなかったの？」

「そ、それは・・・！」

茜の声が裏返る。

「こ、今月で、もう五件も、起きているし・・・見に行っただって、仕方無いって・・・。」

「民家は、初めてだった、そうじゃあ、ないですか。」

「夏希・・・夏希を、放ってなんて、行けません・・・。」

褪せた緋色の膝上で、握り締めた拳は白い。微かだが、震えている様にも見えた。

「・・・御姉様・・・。」

夏希の顔は相変わらず変化が乏しい。細い声も変わらない。しかし、煙々羅の姿を見てから、どこかが変わった気がする。

おお、と遠くで啼く風の音。

「・・・夏希さんの病は、何なので？」

「それは・・・。」

茜の手から更に血の気が引く。

「・・・ご両親は、どうやって、亡くなった？」

隠し様の無くなった震えを誤魔化す為か、それとも別の意図で、きゆうと唇を噛み、茜は俯いてしまった。

薬売りの手中で、鬼がかたかたと歯を揺する。急くな。窘める低い^{たしな}声。

風の啼く音が聞こえる。先刻よりも、少し近い場所で。

「夏希さん・・・貴女の病は、何だ？」

赤い着物に、能面が乗っている。禿の面か。では、面の下は。

「ご両親の死因は？」

いつそ冷徹に綴られる男の言葉に

「やめて!!」

姉の悲痛な叫びと

「焼死よ。」

妹の細い声が、応えた。

焼死よ。

夏希が事も無げに呟く。

「火に吞まれて死んだそうですわ。私が産まれたその夜に。」

「ほう。」

ずっと細められた青い双眸。映るのは、赤。

「詳しくは、知らなかったと、聞きましたか？」

「産まれたばかりの赤子が、詳しく覚えてると御思いですか、御客様。」

淡々と述べる能面。真つ赤な着物の横では、其れの姉が、蹲^{つすくま}つて震えている。

「では、薄っすらとは、覚えていると？」

「綺麗でしたわ。」

風の啼く音と、褪せた緋色の上げた奇声とが重なった。

「貴女の病は、何だ？」

「違う、違う！夏希は・・・！！」

「御姉様。」

緋色の言葉を遮るは、紅。

りん。啼く鈴の音。

「御姉様、もう結構です。」

「夏希っ！」

「焼け崩れた家の中で、私は火傷一つ、無かったそうですわ。」

能面が、笑う。

「神様に、選ばれたのです、私は。産まれた其の日に、祝福されたのですわ。」

目出度い。ほんに、目出度い。

「ですから、私、事ある毎に神様へ奉げ物をしてましたの。贄を、火にくべて。」

「違うの、夏希！」

姉が叫ぶ。妹は取り合わない。

「神聖な儀式ですので、人目に触れない様に注意していた筈なのですが・・・。ある日、御姉様に見付かってしまいましたの。其れ以来、御姉様がいらっしゃる時は、私、部屋から出して貰えなくなつて。」

「・・・それで、夜中に？」

ええ。禿の面が肯いた。

「嘘よ！だって、夜、襖は開かないように・・・！」

「煙が、出して下さいましたわ。」

おお。

風の音。

「煙は神様の御使いなのでしょうね。贄を求めていたのですわ、きつと。」

禿は嗤う。

「違う！違うわ！！」

緋色は叫ぶ。

おお。

風が啼く。

ちりん。

天秤が傾く。

「貴女を火から守ったのは、お父さんとお母さんのよ！！」

「・・・え・・・？」

おお。

風の音。

ちりん。

鈴の音。

かちん。

鬼の音。

大詰め

燃えている。

部屋が燃えている。

私は産着で布団の中。

ばたばたと音がする。

男が一人、女が一人、私の部屋に入ってくる。

赤い色が見える。

二人は何かを話している。

黒い煙が入ってくる。

黒い煙が部屋を満たす。

女が私の頭を撫でる。

男が私の手を握る。

私の上に何かが被さる。

轟々と音がする。

悲鳴が聞こえる。

厭な臭いがする。

何時まで経っても熱はこない。

「・・・嘘・・・嘘よ・・・。」

呆然と呟く夏希に、ゆっくりと首を横に振る茜。

「嘘じゃあないの、夏希。アナタはね、お父さんとお母さんの、亡^{なき}骸^{がら}の下から、見つかったのよ。」

「嘘。嘘、嘘よ。嘘だ・・・嘘嘘嘘嘘・・・。」

崩れ落ちる、禿の能面。

札の目玉が赤く染まって、其の様子を見ている。

おおお。窓の外に煙が居る。怨霊の様な顔は、何を願っているのか。

「夏希！だから、もう・・・！」

「嘘だ！」

夏希が叫ぶ。

「それじゃあ・・・それじゃあ、私は・・・。」

窓の札が赤黒く変色し、ぼろぼろと崩れる。

「私は、只の、人殺しじゃあないか！！！」

おお。哀しそうな音と共に、夏希を覆うのは煙々羅。

嗚咽が耳を打つ。十二に成った娘の肩に、圧し掛かる四つの命。

「夏希、夏希！姉ちゃんがいるから！一緒に背負うから！」

だから。姉は必死に呼びかける。暗闇に覆われた妹の心に。導と成るべき光を灯す為。

「だから、一緒に生きていこう！！！」

かちん。

「・・・揃った。」

剣に配された玉石が輝くのを見て、薬売りは満足そうに呟く。

「夏希さん、確かに、貴女のした事は罪深い。しかし、それで終わってしまつては、モノノ怪に成つてまで、貴女を見守り続けたご両親が、余りに、報われない。」

そつと剣を掲げ、薬売りは続ける。

「モノノ怪は、俺が、斬り、被おう。だが、その願いを全うする事が出来るのは、アンタだけだ！」

「・・・願い・・・御父様と御母様の・・・。」

「その決意が、アンタには、在るか。姉と共に、茨の道を歩く決意

が？」

「・・・私、は・・・。」

ゆらり。煙々羅が薬売りを睨む。娘を悲しませる男を、睨む。

「・・・御姉様・・・。」

「おいで、夏希。一緒に、行こう。ね？」

「・・・御姉様！」

夏希が駆け出す。茜に飛びつく。それを優しく受け止め、姉は微笑む。

「薬売りさん、お願いします。お父さんとお母さんを、天国に、送ってやって下さい。」

「承知。」

短く答えて、剣を頭上に放る。ぴたりと空中で停止した其れに指を添えて、薬売りは凜とした声を張った。

「解き、放つ！」

光が在った。

火では無い。それでも、暖かい光だった。

嗚呼、私は余りにも無知だった。

何時だって、父が居た。母が居た。そして、姉が居た。それなのに、父母は、私の為に、私の所為で、あんな姿に成り……。ああ、だから、嘆いていたのか。

光が、左手の剣を振るう。剣の軌跡は美しく、花を散らした様で。其れは、まるで、饒はなむけの様で。

御父様、御母様・・・。

「今まで、有難う御座いました。・・・此れからは、天国で、見守

つて下さいませ。」

御姉様と、今度こそ、道を違わぬ様に、歩んで行きます。

花が舞った。

姉妹は、両親の墓参りに来ていた。

熱心に手を合わせる妹。その隣で花を供える姉。

暫く黙祷していた二人が立ち上がる。

「さあ、行こうか夏希。」

姉が手を差し出す。

「はい、御姉様。」

笑顔を浮かべ、妹は手を取る。

能面を被った禿も、火を神と崇める赤馬も、其処には居なかった。
ひらり。

姉妹の眼前を、蝶が一頭、優雅に飛んで行く。

「御姉様、蝶々。」

妹がはしゃぐ。姉が微笑む。

「ねえ、夏希。・・・知っているかい？」

蝶々はね、人の魂を、運んでいるんだって。

緋色と紅の着物が並んで歩く。

蝶は、暫くその様子を見ていたが、やがて、ゆっくりと空に舞って行った。

大詰め（後書き）

お付き合い頂き有難うございました。 ちよつと不完全燃焼感が否め
ませんが、完結した事に一安心です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6783m/>

赤馬

2010年10月10日14時28分発行